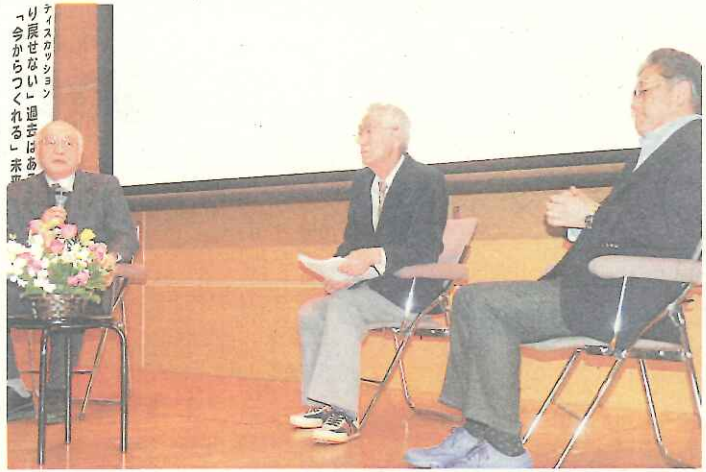
アルコール健康障害フォーラム

地域社会全体で支援



アルコール健康障害への対策強化の重要性を強調した、左から加藤純二さん、高橋俊晴さん、小関清之さん ＝山形市

アルコール健康障害について理解を深めるフォーラムが11日、山形市総合福祉センターで開かれた。医師やアルコール依存からの回復者、精神保健福祉士がそれぞれの立場から対策強化の重要性を主張し、聴講者は身近に取り組める支援の在り方について考えた。

山形 医師、回復者ら訴える

宮千代加藤内科医院（仙台市）院長の加藤純二さん、県断酒連合会長でアルコール依存症から回復した高橋俊晴さん（東根市）、任意団体「アルコール健康障害対策基本法推進ネットワーク」幹事の精神保健福祉士小関清之さん（山形市）が意見を述べた。

加藤さんは、依存症のタイプに▽精神的依存（病気でも飲酒を続ける）▽耐性の増強（飲めば節酒不能）▽身体的依存（離脱症状を回避するための飲酒）―の三つを挙げた。飲酒習慣の把握が重要とし「周囲の人が困っていれば、それは治療の対象」と指摘した。

高橋さんは約30年前に医師からアルコール依存症と診断され、「飲めば疲れ、疲れては飲みを繰り返した。精神的に不安定になった」と振り返った。「完治はないが、回復はできる。ただ一口飲めば、また症状が出る」と入退院を繰り返したという。妻の支えや断酒会での仲間との意思疎通などがあり、10年ほどかけて断酒した経緯を語った。

小関さんは依存者を支援する立場から、「地域社会全体で依存者への差別や偏見を捨て、その人を理解することが大切」と、さらなる支援の必要性を訴えた。「早期発見や支援充実に向け、アルコール相談支援センターの創設が重要だ」と提案した。

アルコール関連問題啓発週間（11月10～16日）に合わせ、県村山総合支庁が主催し、医療関係者ら約130人が聴講した。県は来年度、国の計画を踏まえ、地域の実情に照らしたアルコール健康障害の対策推進計画を策定する。

平成29年11月13日（日）
山形新聞（社会面）